旧制和歌山中学校（桐蔭高等学校）

	名称	所在地	建築年代	登録基準
1	旧制和歌山中学校図書館（桐蔭高等学校同窓会館）	和歌山市吹上 5 丁目 1-17	昭和 4 年（1929）／昭和 53 年（1978）改修	一
2	旧制和歌山中学校運動場スタンド（桐蔭高等学校運動場スタンド）	和歌山市吹上 5 丁目 39-1 他	大正 11 年（1922）／昭和後期改修	一

※登録基準 一　国土の歴史的景観に寄与しているもの
二　造形の規範となっているもの
三　再現することが容易でないもの

旧制和歌山中学校は明治 12 年（1879）最初の県立中学校として真砂町に開校した。その後移転を経て、大正４年（1915）に現在地に校舎を新築した。戦後は、旧制和歌山女学校とともに、昭和 23 年（1948）に新制高等学校である桐蔭高等学校が開校し現在に至っている。

図書館（同窓会館）は、昭和 4 年（1929）に開校 50 周年の記念事業として保護者の寄付金で建てられた。鉄筋コンクリート造、平屋建、陸屋根の建築で、当時敷地の北側にあった正門を入ってすぐ東に西面して建つ。設計者、施工者は資料が無く不明である。昭和 53 年（1978）に閲覧室後方の書庫を撤去し、同窓会館として改修されたが、旧閲覧室部の外観は旧態をよく残す。

正面玄関ポーチには太い円柱や手摺りを置いて重厚な意匠とすると同時に、庇下の蛇腹や正面壁面中央に飾られた旧制中学校校章によって、水平線を強調している。側面は外部は連続縦型窓を配し、奥行きを強調しており、モダンな意匠の近代建築である。細部は和歌山中学校の「中」をモチーフにした床下換気グリルに至るまで工夫が見られる。

運動場スタンドは、敷地背後の丘陵斜面を活かしたコンクリート製の観客席で、校地東半を占める運動場の北辺と東辺に設けられた。大正 11 年（1922）に全国中等学校優勝野球大会での 2 年連続優勝を果たした直後、和歌山県や和歌山市、また有志からの寄付金によって建設された。竣工後に皇太子（後の昭和天皇）が行啓され、初めて野球観戦をされたとの記録が残る。

北翼部は長さ約 52m で、西側 11 段、東側 10 段、長さ約 112m の東翼部は 12 段から成る。最上段に設けられた塀は当初コンクリート柱に鉄線張りであったが、現在はコンクリートブロック造である。塀のほか、客席の細部において外観上の変更が見られるものの、スタンド全体の構成としては当初の様子をよく残し、今なお同校の運動場スタンドとして現役で使用されている。同窓会館とあわせ、和歌山県下の名門旧制中学校の歴史を物語る貴重な遺構である。

向井家住宅

	名称	所在地	建築年代	登録基準
1	向井家住宅主屋	和歌山市加太 1394	万延元年（1860）／平成 12 年改修	一
2	向井家住宅土蔵	和歌山市加太 1394	江戸末期	一
3	向井家住宅表門及び袖塀	和歌山市加太字北仲丁 1394-1	昭和前期	一
4	向井家住宅塀	和歌山市加太字北仲丁 1394-1	昭和前期	一

※登録基準 一　国土の歴史的景観に寄与しているもの
二　造形の規範となっているもの
三　再現することが容易でないもの

向井家住宅は和歌山市加太に所在する住宅である。鎌倉時代後期以降、葛城修験の一之宿であった伽陀寺の別当職を務め、「迎ノ坊」と称されている。本山派修験道の本山である京都の聖護院との関わりが強く、現在も行われている聖護院の葛城入峰の際には聖護院が当家に立ち寄っている。

屋敷は旧淡嶋街道に面して、表門及び袖塀を構え、敷地中央に引き込んで主屋を建てる。主屋の北側には土蔵が建てられている。

主屋は木造、平屋建、入母屋造、瓦葺である。棟札が残されており、向井嘉左衛門により万延元年(1860)5 月 4 日に上棟したこと、材料は同家支配の地から調達したこと、また加太や本脇、深山の大工が関わったことが知られる。

主屋は整形四間取形式で、正面側には十畳間の部屋を二室並べ、西側の部屋を主室の座敷とし、床の間を設け仏壇を構える。各室はいずれも畳敷であるが、天井を大引天井とし、長押は打たず太い梁を使用した堅固な造りになる。正面には格子を構え、屋根には煙出しを載せており、伝統的な住宅の造りを良く保っている。

土蔵は土蔵造、平屋建、切妻造、瓦葺である。建築年は不明であるが、江戸時代末期の建設と考えられる。比較的建ちの低い、小規模な土蔵であるが、中央部に土戸を構え、正面庇は重厚な持送りで支える。

表門及び袖塀は木造、平屋建、瓦葺の門構えに、塀を両側に設けるものである。建設年代は不明であるが、昭和前期に建設されたものと考えられる。

向井家住宅は、主屋は万延元年に建設されたことが明らかで、ほぼ同時期の土蔵に加え、昭和前期の表門や塀よりなるもので、中世から続いてきた葛城修験との関わりを今も残しつつ、加太の町並みの歴史的景観に寄与している貴重な文化財である。

（向井家の沿革については、小橋勇介「加太・向井家文書目録」『和歌山市立博物館研究紀要 31』、2016 年を参考とした。）

旧加太砲台（きゅうかだほうだい）

	名称	所在地	建築年代	登録基準
1	旧加太砲台弾廠（だんしょう）	和歌山市加太 1907-2	明治後期	二
2	旧加太砲台厠（かわや）	和歌山市加太 1907-2	明治後期	三

※登録基準 一　国土の歴史的景観に寄与しているもの
二　造形の規範となっているもの
三　再現することが容易でないもの

由良（ゆら）要塞は旧帝国陸軍が大阪湾の海上防衛のため、明治 22 年（1889）に起工し、日露戦争開戦直前の明治 37 年（1904）に一通りの施設が竣工した。海峡の中央にある友が島に５カ所の砲台、和歌山側に加太砲台を含む５カ所の砲台、淡路島には８カ所の砲台が構えられ、本部は淡路島の由良に設けられた。

このうち加太砲台は砲座４門を備え、加太市街地の南の山上に建設された。砲座の南にやや離れて、弾廠、砲具庫、厠が並び建ち、さらに離れた山の中腹に火薬庫や営舎が建設された。しかし一度も実戦で使用されることは無く、終戦を迎えた。

砲台の跡地には和歌山市によって、昭和 48 年（1973）に少年自然の家が建設された。その際、中央の第２・第３砲座は撤去されたが、弾廠、厠は、国有のまま和歌山市が借り上げ、市営住宅として使用されてきた。

弾廠、厠は、平成 29 年に国から和歌山市が取得、平成 29～30 年の保存修理で当初の姿に復原された。平成 30 年開設の和歌山市立青少年国際交流センターに付属する旧砲台の展示施設として活用されている。

弾廠は木造、平屋建、切妻造（きりづまづくり）、瓦葺の建物である。建築年は不明であるが、明治後期の建設と考えられる。大きく 3 つの部屋よりなるが、各室の名称や用途は不明である。しかし弾廠という名称から、砲弾に火薬を詰める作業をした工廠（こうしょう）と考えられる。

中央の部屋は、貫（ぬき）や筋交（すじかい）を現（あらわ）しにした内装のない部屋で、ここが実際に弾を造る作業をした部屋と思われる。床は土間、窓は無双窓（むそうまど）とした極めて実用的な部屋である。一方両脇の部屋は、床は土間、天井は小屋組現しであるが、内装の壁板を張り、ガラス窓を設けており、作業詰所や指揮所のような用途と考えられる。小屋組は洋式のトラス組で、小屋組材にまで丁寧に鉋（かんな）が掛けられている。

厠は木造、平屋建、切妻造、瓦葺の建物である。こちらも明治後期の建設と考えられる。高く煉瓦基礎を積み上げた外観で、東側に仕切りのない小便器を幅一杯に構え、西側に大便室を 8 室構える。

弾廠と厠は極めて実用的な軍用の建築でありながら、出入口の額縁構えや、板を柱に入れ込んだ下見板張りなど手の込んだ造作が見られ、明治後期の陸軍営繕の仕様や、施工の実態が良く分かる事例である。

山﨑家住宅

	名称	所在地	建築年代	登録基準
1	山﨑家住宅主屋	紀の川市粉河 853-3	大正 6 年（1917）／平成 25 年改修	一
2	山﨑家住宅南蔵	紀の川市粉河 853-3	大正後期	一
3	山﨑家住宅北蔵	紀の川市粉河 853-3	大正 7 年（1918）	一
4	山﨑家住宅塀	紀の川市粉河字東鳥居 853-3	大正後期	一

※登録基準 一　国土の歴史的景観に寄与しているもの
二　造形の規範となっているもの
三　再現することが容易でないもの

山﨑家は和歌山市内で綿ネル業を経営した家である。JR粉河駅のすぐ北側に広い屋敷を構え、街路に面し中央東寄りに門を構え、その他は煉瓦造の塀を巡らす。主屋を敷地中央に建て、街路に面して南蔵、敷地の背面側に北蔵を建てる。現在は社会福祉法人によってカフェやイベント会場として活用されている。

主屋は大正 6 年（1917）5 月 30 日に上棟した。施主は山﨑栄助である。大工は和歌山市と高野山の大工が関わったことが、上棟のさいの棟札に記されている。入母屋造、二階建、瓦葺で、東の大広間部は平屋建となる。二階建部分の南側に玄関があり、北に次の間六畳と、床の間・違棚を備えた八畳の座敷が続く。東に折れると大広間がある。

大広間は十五畳の座敷と十畳敷の仏間から構成されている。大広間は極めて豪華な造りで、一間半の床の間に違い棚や付書院などの座敷飾りを備え、壁は金唐紙を貼っている。また、天井は折上格天井である。

南西の勝手口から通り土間を進むと台所がある。台所の東には、階段室がありここから二階へ上がる。階段や手すりは直線を基調とした洋風意匠で、壁には丸窓を開き、天井は格天井とする。二階は、東側に十畳の主座敷二間があり、それぞれ次の間が備わる。北西の八畳は、天井を傘形に張る。この傘天井は竿縁をあたかも傘の骨のように放射状に配置した特徴あるものである。

南蔵は土蔵造二階建、瓦葺の重厚な土蔵で、建ちも高く、屋敷景観の要となる。また北蔵は、土蔵造二階建、瓦葺で、一階は三室に分けるが、二階は広い一室とする。北蔵は上棟式の幣串が残り、大正 7 年（1918）に建設されたことが知られる。

以上、山﨑家住宅は、和歌山の代表的な近代産業である紀州ネルに関わる商工業によって財力を蓄えた経済人の住まいとして、地域性や時代を反映した建築であり、特に主屋内部は、伝統意匠をベースに形式にとらわれない質の高い意匠が随所に見られ、加えて洋風も導入するなど、近代和風建築としての特色を備える。また目の詰んだ桧の良材を多用しているのも特筆出来る。敷地全体においても大正時代の屋敷構えがよく残る。

令和２年７月　新たに登録が答申される建造物

１．旧制和歌山中学校図書館
（桐蔭高等学校同窓会館）

２．旧制和歌山中学校運動場スタンド
（桐蔭高等学校運動場スタンド）

３．向井家住宅
屋敷の正面
表門及び袖塀越しに主屋が見える

4．向井家住宅
主屋（おもや）

5．旧加太砲台
弾廠

6．旧加太砲台
厠

7．山﨑（やまさき）家住宅
主屋の正面

8．山﨑家住宅
主屋１階大広間

9．山﨑家住宅
主屋２階の傘天井の部屋